歴代会長からのメッセージ

第９代会長からのメッセージ

ニューガラスフォーラム第９代会長
石津　進也
（2004年６月～2006年６月　会長）

ニューガラスフォーラム（NGF）は1985年にHOYA，日本電気硝子，日本板硝子，旭硝子の４社が発起人となって設立されたが，その礎を築かれたHOYAの当時の社長鈴木哲夫氏が本稿の執筆を依頼された最中，90歳でその生涯を終えられたとの訃報が舞い込んだ。本誌をお借りして心から敬意と哀悼の意を表したい。

筆者がNGFの会長の任にあった2004年から2006年は，NGFの「産・官・学の連携および国際交流を推進しニューガラス産業の整備及び振興を図る」という役割につながる新規プロジェクト（ガラス新溶解）のスタートや国際ガラス会議の日本開催（2004年），GICガラス技術シンポジウムの開催（2005年）と大きな行事が続いた時期であった。

当時は，NGFを含むガラス関連６団体によるガラス産業連合会（GIC）が2000年に立ち上がり，産業界が一体となって基盤整備及び振興を加速する機運が高まっていた。NGFもGICにおける技術の代表と言う位置づけで活動を行っていた。

2004年に30年ぶりに日本で開催された第20回の国際ガラス会議（ICG）には，各国から多数の著名なガラス研究者が京都に集結し，学術的，技術的な視点から多くの議論がなされた。主催は日本セラミックス協会ではあったがGICを含め，産官学オールジャパン体制で運営にあたったことを記憶している。NGFは2001年より開始した「ナノガラス技術」の成果を発表し，大きな関心を集めた。

今，発足から30年の時を経てNGFの歴史を改めて振り返ると，活動の中心であったのは，①国家プロジェクトを通しての研究開発の実践，②ガラスデータベース（INTERGLAD）やガラス産業技術戦略書に代表されるガラス技術情報の提供，③研究会や勉強会などの場の提供，④産官学の橋渡し役　であったのではないかと思われる。

光通信，半導体，ディスプレイ関連などの日本のニューガラス産業は，日本の電機，電子メーカーと共に発展してきた。NGFはガラス会社だけでなくユーザー企業も会員となっている点が他の団体とは違うところで，上記活動やこの点も相まって産業界の発展に貢献してこられたのではないかと思う。しかしながら，30年の間に世界の競争環境が大きく

変化してきていることを疑う人はいないと思う。今後，日本のガラス業界の発展のためには，今まで以上に踏み込んだ産同士，産官学の提携は必須と言える。その中で日本初の新材料，新商品，新プロセスが生まれて産業界に貢献してくれることを　またNGFがその過程で重要な役割を果たしてくれることを期待してやまない。